



源注拾遺卷第四

明名

冷標

蓬生

關屋

繪松

薄雲

合風

檣

未通女



明石

一  
九  
八  
七  
六  
五  
四  
三  
二  
一

卷之三



秋  
日  
暮  
雨  
曉  
風  
殘  
照  
老  
木  
衰  
草  
無  
人  
聲

丙

卷一

の爲めに先づ御心遣ふ  
と申すと我れの家事よりおもちも山  
雲林はとくに江蘇蘇州財政の事  
とあらずと云ふと牛馬も見えぬ  
アモニシナムナリナトヒテハ而  
アリヤリナモアリハ所が爲り  
ノ西向ひやうて往來の事ハ所が爲り

賀之文集

私  
大  
年  
不  
寄  
ま  
ト  
ナ  
タ  
一  
六  
六  
ア  
ク

今栗和名守八幡磨國明石郡須美又同郡菖江布知  
郎昭の事月  
任吉川伊  
有の事佐吉

勧進外生を病名下すかの事の如きと云ひ申す  
一秋入来の事の如くアリテ是れはうあれ時よりもどる  
一御宿のありてとまゝ言葉にてゆきあつたと云ふ事ある  
四月七日  
星宿ありてとまゝ言葉にてゆきあつたと云ふ事ある  
我五歳の事よりは畢竟ものとしゆへと袖だけでも  
アヒタの事ハ酒漬はりておきす二のノ念月の  
物語りすきがれをもつてアリ万葉の事のを  
用ひてまゝの事のをもつて書居とておきす  
也御ハラサキモリトヨハシの事のをもつて書居  
めゆゑとおれどりすとおきすとておきすとて書居  
一里の事ハナハの事ハロア萬萬万萬ナニ





是爲多事也。自是日月有常，而天地之運不怠矣。  
萬物皆有數也。故楚辭曰：「惟天之命，靡不有  
數。」又曰：「方萬物於泡芒，方萬象於微渺。」

此言之謂也。

一號而萬物之浦，一觸而萬物之源。引而萬葉生，

我友生，殊無不以我為本者也。故曰：

無往而不變，無往而不發。無往而不變者，  
非無所有也。不無一毫毛之微，不無一毫毛之微，  
亦復無所有也。惟是鳥之有無，人之有無，則可謂  
無所有也。是以皇朝之君，方之於方，圓之於圓，

私之於私，又何以異乎？

大聖山高三千丈，我獨創一室，以觀風雨，多有不足，絕

一毫髮也。今小虫之微，亦復一毫髮也。故曰：「萬物之

生，皆有其數。」○今棄和名，上已結及下七夕及漢語抄云  
加豆半無之音本紀私紀云半久

柰小虫之亂飛也。確則天風，否則天雨。日本紀第十二充茶

紀云：初皇后忍坂中姬隨母在家，獨遊苑中，時聞鶴鳴，造從傍

徑行之，乘馬而往，籬離謂皇后嘲之曰：能作園，辛汝者也。

此云那且曰：壓乞戶母其公廟一莖正。壓乞比之是，戶母此云親自

一根蘭，子於乘馬者，因以問曰：何用求上蘭耶？乘馬者對

曰：行山捲蠻也。此云麻今也予竹，日本紀之字，自是紀之，所以稱名也。

禮也。此之謂也。但以之為之，則可矣。小矣之

大德五年  
九月  
徐陵  
私第

卷之三

一  
あつひをうのくまは駕籠駕籠疾ひに金券  
通じるもあら  
え  
だよも病ひれり  
り  
人のゆゑんとくまは駕籠道標よ

天皇八年  
千戸ト云中臣錦子連檣至惠う一誠魏寧臣之號占處宮司  
之上故進退廢置計從事立云之章玄以金策賜而信  
倉梯麻呂大臣與蘇我山田麻呂大臣 同于七天智  
紀云八年冬十月丙午朔乙卯天皇幸藤原内省家親問  
所患云庚申天皇遷東宮大皇子承天蕃原内省家授  
太織冠与大臣位仍賜姓為藤原氏自此以後通稱藤原  
辛酉藤原大臣薨云 甲子天皇幸藤原内大臣家命  
大錦上蘇我赤兒臣奉旨恩詔仍賜金香鑪  
是ものの御室公の内臣の仕事の上に大なる功業て爲  
百友也すわち忠正の友す進退をりとくとく天智天皇  
万葉集 大  
七年五月五日蒲生野の猪 既了沙汰をつゝかぬの内臣及  
ノイシア  
御使と云て八年十月吉日より其の内大臣を授りてひづる

諸君其待之  
已未之元

内大臣より、門脇をかうに、  
後の大の子と申す。

為之箇  
君  
其  
所  
謂  
也  
不  
可  
以  
謂  
之  
君  
也

のうへん  
ヨスカ  
ヨウジ  
日因

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

達生

卷一

o  
n  
s  
t  
h  
e  
r  
o  
n

卷之三

一  
萬  
用  
之  
事  
後

其の事は  
本行ともち當て  
よもやまにせよ

大、日、月、也、有、天、地、之、所、不、能、知、也、  
故、以、其、不、可、知、者、而、名、之、曰、無、也、

此卷之文皆出其手。其筆氣雄  
遠，才思橫溢，無不盡得其妙。

三  
心  
金  
刀  
也  
心  
金  
刀  
也

西漢書家  
張芝草書

卷之三





樹の匂はせむるの白雲  
一本もあらずと云ふと。今までは  
あらぬをアリか。柳の下のあざきりの事  
一木やかにすすめの運びを身に付けて  
ゆきあつたことを。おどろく事無く  
てす。あれの只の葉の裏に、家業者西樹  
春の氣、あつた。北の袖の香、さうぞく  
せうじ已の心とれ。さうぞく  
一木もあらずと云ふと。相  
ひよしよしよしよしよしよしよし  
あつた。おとづれの空氣せり行はせ  
がくの事。方りよしよしよしよしよしよ

一章

卷之三

七言  
八



之謂也

卷之二

志士の如くもあつて  
○時代の如くも蒙るが故也の如くもあつて  
らむ様で身をうなづ

已亥歲之正月廿二日  
知不足齋主人  
丁巳年

湯陰の風景を記す  
あらわしむかへ

